

# 「CAN-DO リストを活用した外国語教育」

札幌市立八条中学校

## ■はじめに

「CAN-DO リストを活用した外国語教育」に取り組むに当たり、CAN-DO リストの再検討から始めた。昨年度の時点で既に本校ではCAN-DO リストがあったが、実際にどのような授業（パフォーマンステストや各種テスト、ALT のアクティビティも含む）を行っていくかということ踏まえ再編集することとなった。また、今年度から本校に赴任した英語科教員も多く、昨年度のCAN-DO リストの存在や互いにどのような授業を行うかという点において引き継ぎが不十分な点もあった。そのため、昨年度のCAN-DO リストを元に英語科教員で話し合い、それを英語科全体で確認し、再編集した。この作業では、三学年を通して前の学年の内容を受け、発展されたものになっているかという部分にも注意が必要であった。また、技能間で関連づけられるところを探し、リスト内の罫線を工夫するなどして視覚的に分かりやすくした。

## ■日常の実践指導の工夫

昨年度の授業では文法の定着に終始し、「教科書を教える」という場合が見られた。ALT のアクティビティにおいても、ある文法や言語材料に焦点を当て、それを使ったドリルのようなゲームが多く、実際に使う場面があまり想定されていなかった。そのため、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」および「言語や文化についての知識・理解」の観点において主として身に付き、「外国語理解の能力」や「外国語表現の能力」、で大きな課題が残ることとなった。

今年度、CAN-DO リストを作成して活用することで最も変化したのは、パフォーマンステストである。例えば、昨年までの指導では「店で物を購入するときの言い方」を「教科書どおり」本文を暗記して流暢に話すことができれば、よい評価となっていた。しかし、それでは実際に自分の欲しい物を所持金や値段などに応じて現実に沿った状況で注文できるか、使える英語になっているかは分からない。これを踏まえ、今年度のパフォーマンステストでは、CAN-DO リストに沿って、丸暗記ではなく与えられたテーマに関して状況に応じて対話を続けたり、自分のことを表現することを意識させたりすることができた。特に「即興性」というところに着目し、先の買い物のことを例とすると、パフ

ォーマンステスト直前に買いたい物や所持金について指定し、買い物を行う（丸暗記したものを伝えるだけでは目標を達成できない）ことにした。

また、教科書の暗唱テストでは、登場人物であるマイクになりきり、鳥獣戯画について説明する（第三学年 Program 6-1）という形式をとり、「プレゼンテーションを工夫する」「本文の流れを変えないように文や表現を追加しても良い」というルールを設けた。その結果、つなぎ言葉や相手に分かりやすく伝えることのできる話し方の工夫などが見られた。

文法の指導においても、文法の用法の説明や反復練習に終始したりしないよう、その言語材料を学ぶことで「何ができるようになるか」といったことを加味して指導するよう心掛けた。

読み物を教材として取り扱った授業では、昨年度まではALT のアクティビティ以外ではあまり行わなかったグループでの言語活動を取り入れた。活動の内容としては、プログラム一つを通し、①グループ内でセクションごとに担当するメンバーを決める、②セクションごとに何が書かれているか話し合いつつ読む、③最後に元のグループに戻って共有するものである。この活動では、さらに「スキミング」の要素も取り入れ、重要な情報を優先して読み取るよう指導した。この活動は、CAN-DO リストにおける Reading の「(概要などを)読み取ることができる」に当たる。

## ■教科書との関連

CAN-DO リストを活用するに当たり、最も効果がみられると感じたのは教科書の My Project や Speaking のパフォーマンステストであると考えたため、Writing、Speaking で教科書との関連を明示した。特に、My Project では、「表現することができる」と「述べる（スピーチや対話）ことができる」につながるように Writing と Speaking を関連させた。

Reading では、「まとまりのある英文」を読んだ際に内容や登場人物の心情を理解できるかという点に重きを置いた。従って、例えば第三学年における Program 9、Program 10 の読み物の部分を教材として、「まとまりのある英文」を初見でどの程度理解できるか、という活動を取り入れた。（活動の内容については『■日常の実践指導の工夫』に明記した。）

一方、Listening では Listening 部分を取り扱うほか、教科書を基にした口頭での質問などを行ったが、一人一人の達成の度合いを見切ることは難しく、『教科書との関連』という点ではよい成果が出なかったと言える。

以上を踏まえ、CAN-DO リストの達成度合いを測ることができるよう、教科書の単元を明記した。これは、教師側も生徒側も CAN-DO リストの項目をどの分野で測るのか分かるように追加したものである。

## ■評価の工夫

従来のパフォーマンステストの評価は、「正確さ」「英語らしい発音」のみを評価していた。しかし、これだけでは生徒にとって、「どうすればこの目標を達成できるのか」非常に曖昧な部分があった。また、その単元で学んだことで何ができるようになったかということが表れにくいという点が挙げられる。つまり、この評価だけ見た場合、どの単元・どの状況でもいいということであり、あえてその場面をスピーキングテストとする必要がないということである。目標をはっきりさせるため、評価基準をはっきりさせる必要がある。従って、CAN-DO リストにおける達成の度合いを測るため、パフォーマンステストの評価シートには「～できたか。」という形で課題達成の正確さを加えることとした。そのため、テストに向けて「何を頑張ればよいか」ということと、その単元で何ができるようになったかが分かるようになった。また、追加した評価は「外国語表現の能力」として測ることとし、元からある評価に点数を加えることとした。

英作文の課題においても、「文の量」「正確さ」に加え、CAN-DO リストを意識して、「理由」や「理由を補足する説明文」の有無を評価の対象とした。この2点については、仮に語順やスペルミスが見られても、自分の意見や考えを補完する理由付けがなされていた場合、評価することとした。こちらもスピーキングテストの評価と同様の効果が得られ、点数としても「外国語表現の能力」に追加した。

通常の評価を替えて、全て CAN-DO リストの到達度で測るというわけではなく、通常の評価に CAN-DO リストの達成度合いを測るものを追加した形となった。

## ■成果と課題■

CAN-DO リストの作成・活用にあたり、一番大きく改善されたのは授業である。実際に授業を進めるにあたり、英語の授業を通してどのような生徒を育成したいのかということを具体的にするために CAN-DO リスト

を活用することができた。CAN-DO リストで定めたものを達成するためにはどんな活動が必要かと考えることで目標と同時に見通しをもつことができる。パフォーマンステストにおいても、英語らしい発音や伝え方だけではなく、「普段の授業で行っていることが実際にどう生きてくるか」ということを評価の対象とすることができ、指導と評価の一体化を図ることができた。学んだ文法をアクティビティとして活用したとしても、「それで何ができるか」ということが明確でなければ「活動あって学びなし」と言える。また、テストを受ける側の生徒にとっても、どういことができたなら目標を達成できるかが明らかになったことも成果といえる。

以上のような成果は挙げられたものの、課題もまだまだ山積みである。

今回の研究を通し、課題として三つ考えられた。

第一に、本校で作成した CAN-DO リストがアウトプットに重きが置かれている印象を受けるところである。改善の余地として、Listening を Speaking における対話の中で関連付けたり、Reading では読み取ることだけでなく、音読にも焦点を当てたりできるということが挙げられる。

第二も、CAN-DO リストそのものが「生徒に分かりづらい」という点である。英語科教員としては、この CAN-DO リストを参照して、目標や見通しを立てて授業を展開することができる。一方で、生徒が読んだときに、書かれた目標がイメージしやすいかどうかというところに疑問が残る。生徒が使える CAN-DO リストの作成を目指したが、こちらはチェックリストの範疇を抜け出せず、課題となった。生徒が使える CAN-DO リストであれば、教員・生徒の共通認識のもと目標に向かうことができたのではないかと感じる。

第三に、CAN-DO リスト活用の利点を実感することに時間がかかったということである。CAN-DO リストを活用し、授業を改善していったため、パフォーマンステストなどの在り方が改善されたと実感したのは時間がかなり経ってからのことである。そのため、他の英語科教員にも CAN-DO リストの利点を伝えることが難しかった。

CAN-DO リストの活用を通し、授業やテストが変化した。CAN-DO リストの改善点も多く見つかった。したがって、CAN-DO リストを作って終わりにせず、次年度以降も改善していきたい。CAN-DO リストと日々の実践やテストの在り方を往還することが必要である。

# 平成27年度 札幌市立八条中学校 英語科CAN-DOリスト

育てたい生徒像	1年	小学校の外国語活動で培われた素地を活かし、初歩的な英語を用いて、自分のこと、または、身の回りの人や話題について、コミュニケーションを図ることができる生徒の育成
	2年	第1学年の学習を基礎として、初歩的な英語を活用し、事実関係を伝えたり、物事について判断し、自分の考えを互いに伝え合い、コミュニケーションを図ることができる生徒の育成
	3年	第2学年までの学習を基礎として、初歩的な英語をさらに活用し、様々な考えや意見などを理解し、さらに発展的に自分の考えを伝え合い、コミュニケーションを図ることができる生徒の育成

(Pro…Program, Sp…Speaking, Li…Listening, MP…My project)

	Input		Output		
	Listening	Reading	Speaking	Writing	
1年	自分以外の人を紹介を聞いて、正しく聞き取ることができ、その内容をある程度聞き取ることができる。(Pro 2,3, MP 1, 2)	自分以外の人を紹介を読んで、アルファベットの文字の形の違いや各符号のもつ意味や英語の綴りを見て正しく読むことができる。(Pro 2,3, MP1,2)	自己紹介や自分以外の人を紹介を <b>20秒程度</b> で述べるができる。(MP 1, 2)	自分や自分以外の人のことを、文の内容に合わせて疑問符や感嘆符などの符号を適切に使用したり、正しい語順や語法を用いて、 <b>5文程度</b> で表現することができる。(MP 1,2)	
	短い(教科書3ページ分)物語を聞き、おおよその概要を理解できる。(Pro 11)	180語程度(教科書3ページ分)の物語を読み、誰が何をしたかを理解することができる。(Pro 11)	他のスピーチに対して質問したり、その質問に答えたりすることができる。(MP 3)		
	教室で使われる英語や、あいさつなどを聞いて理解し反応することができる。		自分に必要な情報(時間・持ち主・値段)を相手に尋ねることができる。(Sp 1, 2, 4)		
2年	旅行ガイドの説明、天気予報などの身近な話題の英語を聞いて、 <b>必要な情報</b> を聞き取ることができる。(Li 1, 3)	250語程度(教科書3ページ分)のまよりのある英文を読み、物語のあらすじを読み取ることができる。(Pro 4)	過去の出来事やこれからの予定を相手に正しく伝えることができる。(MP 4)	過去の出来事やこれからの予定が相手に正しく伝わる、 <b>まよりのある英文</b> を書くことができる。(MP 4)	
	質問やその返答を聞き、必要に応じて聞き返すなどして、対話の内容や話し手の考え、言いたいことを聞き取ることができる。(Li 2)	一つのテーマについて描かれた簡単な文章を書き手の意向を理解して、概要を読み取ることができる。(Pro 12)	将来の夢について相手に <b>わかりやすく</b> 伝えることができる。(MP 5)		将来の夢について <b>6文程度</b> のまよりのある英文を書くことができる。(MP 5)
			自分の賛成意見や反対意見とその理由を述べるができる。(MP 6)		自分の賛成意見や反対意見と理由を書くことができる。(MP 6)
3年	インタビューの質問事項や内容の要点を聞き取ることができる。(Li 1)	360語程度(教科書4ページ分)のまよりのある英文を読み、書かれた内容から書き手の意向、登場人物の心情や場面の变化を読み取ることができる。(Pro 4, 10)	与えられたテーマに関して、相手にたずねたり、答えたりして、 <b>60秒程度</b> の対話を続けることができる。(MP 7)	与えられたテーマに関して、自分の気持ちや考えを、4文ずつ、 <b>計8文以上</b> の対話原稿として書くことができる。(MP 7)	
	アナウンス放送を聞いて、具体的な内容や大切な情報を聞き取ることができる。(Li 2)		地域の行事や自分の興味のある行事に関して <b>わかりやすく</b> 紹介することができる。(MP 8)		地域の行事や自分の興味のある行事に関して <b>わかりやすく</b> 紹介することができる。(MP 8)
	自然な口調で話されたり読まれたりするまよりのある英語を聞いて、概要や要点を聞き取ることができる。(Pro 1～3, 5～9, 11)	偉人の伝記などの、まよりのある英文を読んで書かれた内容やその考え方を理解できる。(Pro 9)	既習の表現を駆使し、自分の大切なものや自己PRを <b>60秒以上</b> で述べることができる。(MP 9)		既習の表現を駆使し、自分の大切なものや自己PRを <b>8文以上</b> の英文で書くことができる。(Pro 7, MP 9)
		自分に必要な情報について、状況に応じて表現を変えて相手に尋ねたり、答えたりできる。(Sp 1～5)	偉人の伝記などのまよりのある英文を読んでその内容について感想を書くことができる。(Pro 9)		

### English Speaking Test

Please evaluate each student from following view points. And mark "A" to "D" on each point. "A" is great / very good. "B" is average / OK. "C" means that he/she needs more practice. When he/she didn't say anything, mark "D".

THE POINT OF VIEW	MARK
1. Did the student make an effort to tell you his/her thoughts and information? Did he/she speak loudly enough? (相手に考えや情報を伝えられるよう努力していたか。十分な声の大きさであったか。)	
2. Did he/she make an effort to speak coherently? Did he/she explain clearly? (文と文のつながりを意識して、自分の伝えたいことを適切に表現していたか。)	
3. Did he/she make an effort to pronounce correctly? (正しい発音など、英語らしく話すことを心がけていたか。)	

#### 〇スピーキングテスト受験の仕方

1. 自分の名前を受験票(このシート)に書き、評価の観点を確認すること。
2. 自分の前の人が受験中、前のドアの所に立ち、受験票を持って待機。前の生徒が終わって教室に入ってきたら、テストを受験しに行く。
3. 受験後、自分の評価の点数の合計を書く。授業終了時に回収します。
4. 自分が会話テストを受けている時間以外は、他の提出物を終わらせるなどの自習をすること。(私語厳禁)
5. 私語をしている・別教科の勉強をしていることが発覚した場合、減点の対象となるので気を付けてください。悪質な場合、0点とします。

Class \_\_\_\_\_ No \_\_\_\_\_ Name \_\_\_\_\_

### Performance Test ~ Speaking 5 ~

#### 靴屋 or 服屋さんで注文しよう

Class: \_\_\_\_\_ No. \_\_\_\_\_ Name: \_\_\_\_\_

項目	評価基準	A (3点)	B (2点)	C (1点)	
関心 意欲 態度	笑顔 アイコンタクト	アイコンタクトをしながら、品物を指さすなどのジェスチャーを入れ、自然な笑顔で話すことができたか。	十分できた	やや不足していた	不十分だった
	声量&明瞭さ	はっきりと相手に聞こえる声量や明瞭さで話すことができたか。	はっきり聞こえた	一応聞こえた	聞こえづかった
表現	発音&イントネーション	英語らしい発音で、聞き手を意識して、特に伝えたい情報を強調して話すことができたか。	英語らしい発音 ができた	やや英語らしい 発音 ができた	不十分な発音 だ った
	評価	評価基準	A (2点)	B (1点)	C (0点)
表現	課題達成の 正確さ	試着をお願いすることができたか。	適切な表現を用いて、達成できた	やや適切に欠けるが、達成できた	課題が達成できなかった
		サイズ交換を申し出ることができたか。	適切な表現を用いて、達成できた	やや適切に欠けるが、達成できた	課題が達成できなかった
		店員の質問に、適切に回答ができたか。	適切な表現を用いて、達成できた	やや適切に欠けるが、達成できた	課題が達成できなかった

関心  
/3

表現  
/12